

カウンターの奥に進み黒いカーテンの向こうに入ると、表の店より大きな部屋になっていて、婦人科の診察台のようなのや巨大な十字架のようなものに枷が取り付けられたもの、その他見たこともない大きな物があり、壁と棚には小さな道具が置いてあった。

そして、奥の方は工作室のようになっていた。

・・・これって・・・見たこともないものとはいっても、見る限り女性を責める道具であるということは、玲香の目から見ても明らかであった。

「玲香の首輪もここで作られたものだよ」

圭介が、玲香の首輪に手をかけて話しかける。

『カチャツ・・・』

首輪を手にしていた圭介が、いつの間にか鎖を取り出し取り付けた。

「この部屋は、表と違って特別な部屋だ」

「玲香は、ここでは本来の家畜奴隷の姿に戻るんだよ」

口調は静かであるが、有無を言わさない言葉の響きで話しかける。

「ハイッ」

玲香はそう答えると、床に四つん這いになる。

圭介は、玲香の足からハイヒールをとると、玲香の頭を二、三度撫でる。

その仕草は、飼い主が飼い犬を褒めているようだった。

「店長、折角なんで先ほどのお客も招待してくれないか？」

「了解しました」

お得意さままで、この店を開くのに援助をしてくれている圭介の頼みとあっては、店長が断る理由はなかった。店長に、特別な招待で他言は無用と言われて、五人ほどのお客が部屋に入ってきた。

アダルトショップに来るだけあって、全員この部屋がどのような目的を持っているかすぐに理解できたようだ。

「おおッ」

そんな部屋の片隅で、彼が手にした鎖の先を首輪に着けられて、先ほどの美女が四つん這いになっているのを見てどよめきが起こった。

「家畜奴隷の玲香です」

「先ほどは人間の格好をさせていましたが、この部屋では本来の姿に戻しています」

圭介が鎖を引張り、お客の前に玲香を連れ出す。

「挨拶」

そう命令されて、玲香が床に頭をつける。

「家畜奴隷の玲香です」

驚いて、誰も口を開くものはいない。

「本日は、皆様の前で人間の姿をしていましたが、これが本来の玲香の姿です」

圭介が、玲香の頭を撫でながら話す。

「今日は、玲香のために特別に発注したものを試着予定ですので、皆さん時間があればその様子を見て行って下さい」

圭介が店長に目配せをする。

「それじゃあ、まずは貞操帯のフィッティングをおこないたいと思います」

「その台の上へ上げてもらえますか？」

店長が指差した場所には、病院の診察用のベッドのようなものが置かれており、その高さが通常のベッドより高く、表面は黒いつや消しのビニールのようなものが張られていた。

店長が下に踏み台を置くと、圭介が鎖を引張って、玲香をその診察台の上に四つん這いにさせる。

高さがあるだけに、四つん這いになった玲香の顔や大事なところが、立っている人間から丸見えになる。

「では」

店長が取り出したものは、黒いエナメル製のショーツで、紐パンのようにサイドで切れており、その両サイドをベルトで止めて鍵がかけられるようになっていた。

それだけでも異様なものなのだが、その真ん中の部分に直径が四センチメートル、長さが一〇センチメートルほどの男根

を模した物が二本生えている。

それぞれの物の入る先は、一目瞭然であった。

「いただいたデーターから、それぞれの位置関係は問題なくフィットすると思います」

「また長さは、あまり長いと傷つけたりするので、適当に抑えてあります」

そう圭介に向かって説明すると、それぞれの先端にローションを塗りつけようとする。

「待ってくれ！見られて充分に潤っているはずだから、前には塗る必要はない」

「後ろも、前の液を軽く塗りつけてくれれば入るようになっているので、ローションは塗る必要はないから」

家畜の取り扱い方を説明しているような圭介の言葉に、店長や見ているお客が驚愕の目で玲香を見つめる。

「……ああー恥ずかしい……圭介のそんな言葉を聞きながら、玲香のオマ○コは圭介の言うとおり愛液が溢れ出している……玲香は、本当に家畜奴隷なのね……見られると気持ちよくなってくる……玲香にとって裸で四つん這いになって、その姿を見られることは、恥ずかしさは消えることはなくても、その恥ずかしさが快楽に結びつくことは確かであった。

ただ、玲香の後ろで話をしているために、どんな貞操帯が取り付けられようとしているのか玲香には想像しかできず、その恐怖心を拭い去ることは出来ない。

「それでは」

「あぁ……」

店長が、玲香の閉じた割れ目に手を伸ばし中に指を差し入れると、玲香の喘ぎ声と共に溜まっていた愛液が一気に溢れ出し、指から溢れて太股に伝っていった。

「本当にローション要らずですな！」

驚いたように店長は声をあげ、玲香の愛液をディルドーに塗りつけていく。

「取り付けます」

玲香のオマ○コとアナルに、異物が押し当てられていく。

「あぐっ……」

玲香が一声あげると、二本の先端が飲み込まれていく。

「あうっ・・・はあゝ・・・」

玲香の悩ましげな声とともに、ディルドーが二本とも玲香の体に飲み込まれて、エナメルの部分が濡れた股間に押し当てられる。

「こうやって挿し込んでから、両サイドの止具で固定します」

「そしてこの部分に鍵を取り付けます」

『カチッ・・・カチッ・・・』

2箇所を止めてしまうと、鍵を圭介の手に手渡す。

「それから、これがスペアーになります」

今飲み込ませた物とは別に、四・五センチメートルから七センチメートルまで五ミリメートル刻みで、オマ○ンコとアナルのスペアーの張型が並べられる。どれも長さは一〇センチメートル程度である。

「それから、これがリモコン式のバイブレーターが内蔵されたタイプで、電池はここで交換します」
同じように、サイズが数種類並べられる。

「もう一つ。これがスペシャルなもので、ここにホースを差し込むと、着せたまま浣腸でき、逆流防止弁がついているのでそのままアナル栓として利用できます」

何枚かの替えのエナメルシーツと、それに取り付ける器具が全部揃う。

「きつと満足していただけたと思います」

店長が圭介の方を見ると、圭介は満足したように頷いた。

「はあっ・・・んっ・・・ああっ・・・」

圭介と店長がそんな話をしている間に、二穴を埋められた玲香が、耐え切れずに声を漏らし始める。

「どうした？我慢できなくなったのか」

「はっハイ」

複数の男性の前で、全裸で四つん這いの姿を晒しているだけで興奮していたのに、オマ○ンコとアナルにディルドーが押し込まれたのである。

なんとも言えない快感が体中を埋め尽くすが、それ以上の刺激が与えられない。

快楽を教え込まれた玲香の体にとって、とろ火のまま放置されているようなものである。

「お願いします・・・ご主人様・・・」

「玲香に・・・お願いします・・・」

腰を悩ましげに動かし、目がトロロンとなり、口はだらしなく開いて涎が今にも垂れそうである。

「皆様には、家畜奴隷の恥ずかしい姿をお見せして申し訳ありません」

そういう圭介に、店長から一本鞭が手渡された。